大神の遠吠え
-岩手県沿岸部におけるオオカミ再導入による地域再生-

廣島　幸音　　園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム（主指導教員：霜田　亮祐）
HIROSHIMA Yukine

１．研究の背景と目的

岩手県沿岸部に位置する大槌町は、10 年前に発生した東日本大震災による津波で大きな被害を受けた。しかし津波がもたらした影響は悪いものばかりではなかった。津波で壊滅した市街地の一部が湿地帯となり、希少な動植物の住処となったのだ。大槌町の海沿いでは、豊かな自然環境が、まちの新たな魅力のひとつにもなっており、自然再生・保護がこのまちの新たなアイデンティティや活力となる可能性を感じる。一方で、山間部は現在消滅可能性都市となっており、やや衰退してきている印象である。そこで本研究では、山間部でもなんらかの自然保護・再生のプロジェクトを提案することで、大槌町全体を野生動植物と共に歩むというアイデンティティを持ったまちにすることを目的とする。また、人間が自らの力や影響力を理解することで、時には手を貸し、自然を敬いながら共に歩んでいくことができるのではないかと考えられるため、対象地には人間がこの土地の自然を知ることができる空間を提案する。本研究では、大槌町山間部の自然環境や文化を調査した上で、そこにふさわしい自然再生・保護の活動と人間がこの土地の自然を学び体験できる空間を提案する。

２．調査と分析

⑴大槌町山間部

自然特性のひとつとして、かつてニホンオオカミが生息していたことが挙げられる。大槌町は東北の中で最も狼信仰が盛んだった地域のひとつで、オオカミとの暮らしがまちの文化にも結びついていた。しかしニホンオオカミは人間によって駆除され、絶滅してしまった。

⑵大槌町におけるオオカミの再導入方法の検討

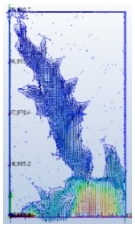
オオカミを導入することで、山の生態系を本来のかたちに戻し、山の自然環境が改善することが期待できる。導入方法は以下の表 1 に示す。

（表 1）

地域	現在消滅可能性都市となっている山間部
導入種	DNA がほとんど同じハイイロオオカミの中でも、生活環境や体格がニホンオオカミと近い中国やモンゴルに生息する種
個体数	収容能力を考慮して３～５頭とする
管理	再導入は安全性の確保や生態系への影響などを考え慎重に行わなければならないため、最初は去勢をして個体数管理を行い、GPS をつけて位置管理を行う

⑶かたちの検討

特徴的な谷地形を活かして、オオカミの遠吠えをはじめとした自然の音を聴くことが魅力的なアクティビティになると考えた。音は風下側によく伝わるという特徴があるため、CFD を用いて流れの分析を行い、それをベースに空間をつくる。



（図１：流れ分析）

３．対象地

金沢小学校中山分校廃校周辺は大槌川に流れ込む小川が流れる谷地形となっている。この場所は消滅可能性都市と存続都市の境目にあり、人と野生動物の境界に位置しているともいえる。

（図２：廃校）

（図３：小川）

（図４：谷筋の道）

４．提案

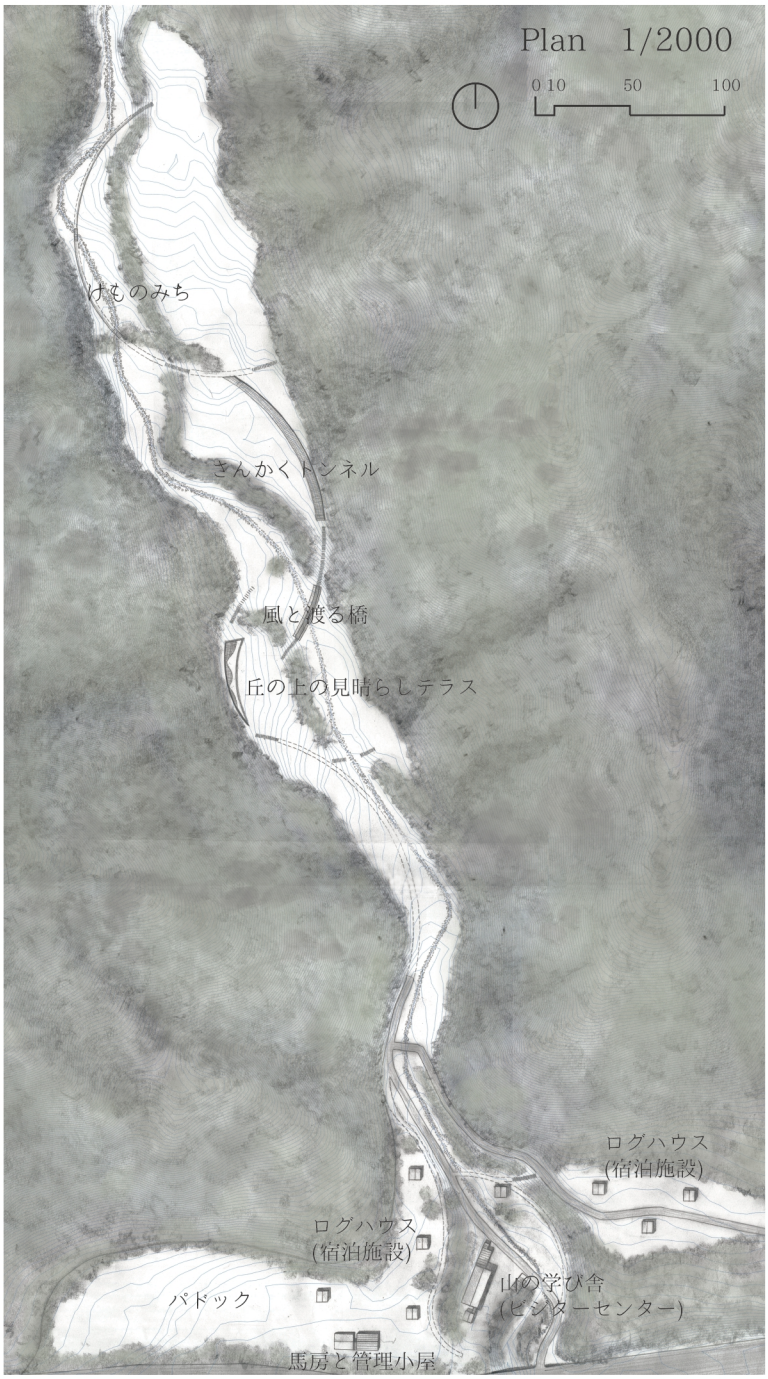
オオカミの再導入にあたって、餌となるシカが生活しやすい森をつくらなければならない。そこで現在スギ林となっている場所を草原や広葉樹林に転換する。廃校周辺は人と野生動物の境界に位置することから、人間がこの土地の自然を学び体験できる空間を重ねて提案していく。

引用文献

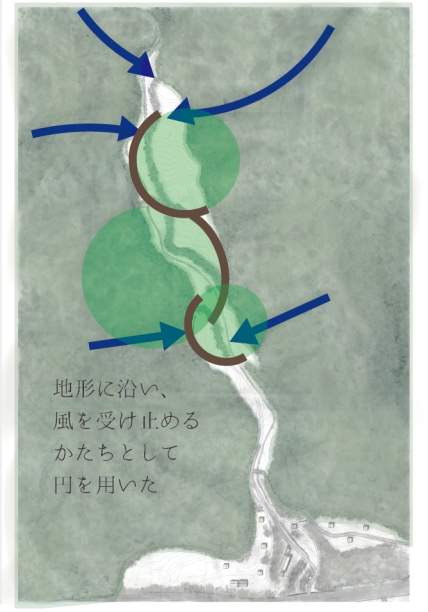
・狼の民俗学-人獣交渉史の研究　　菱川昌子［著］

・オオカミ-その行動・生態・神話　エリック・ツィーメン［著］

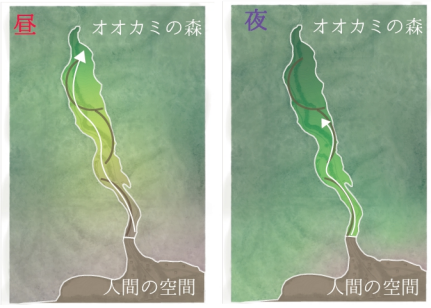
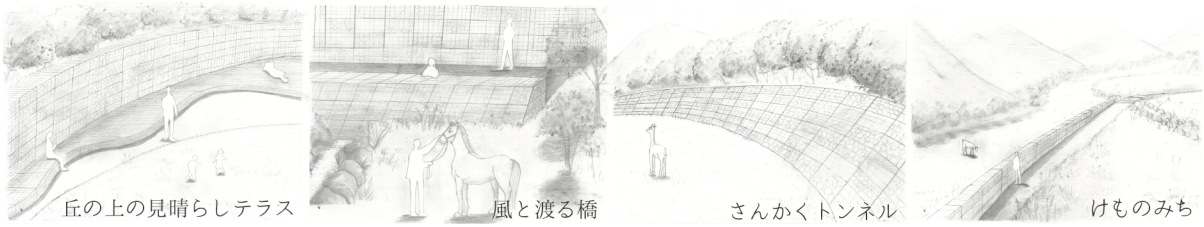
・岩手県 HP　https://www.pref.iwate.jp/index.html



CFD の解析結果を用いて、
谷から風が吹いてきて音が聞こえやすいと
考えられる場所に地形に沿って空間を配置する



野生動物が主となる領域と人が主となる領域が
時間帯によって変化する



昼は自然を感じる散歩道
夜は動物の暮らしを垣間見る探検道